

新刊紹介

ブラジルの社会思想について、大変興味ある本が出版されました。小池洋一、子安昭子、田村梨花（編集）『ブラジルの社会思想—人間性と共生の知を求めて』です。

「（なぜブラジルの社会思想か）、それは、ブラジルに存在する豊饒な社会思想や理論が、混迷する世界について思考し、将来を構想し、目標に向かって行動する人々にとって指針と信じるからである。・・・ブラジルは日本ではしばしば後進性を持って語られるが、それはまったく事実ではない。ブラジルには人権、ジェンダー平等、市民の政治参加、民衆運動、環境保全、多元的外交、文化創造など、多方面で先進的な試みが多数存在する。そして被抑圧者の教育学、従属理論、解放の神学、多文化主義、世界社会フォーラムなど、人間性と共生の価値観に基づく、先駆的で、創造性に富む思想や運動を生み出し発展させた場でもある」（編者はしがき）。

「文豪マシャード・ジ・アシスからルーラ大統領まで。激動と困難の時代を生きぬき、脈々とつむがれてきたブラジル社会思想のエッセンスを集成。暴力的な対立と分断の危機にさらされた社会に、南の世界が指し示す対話と共生のためのヒント。ブラジルの社会的現実に対応して独自の思想を生み出してきた思想家・表現者たちを取り上げ、各章・コラムでその生涯と仕事を解説」と帯封で説明してあります。

構成は、次の4部立てで20章から成っています。特に筆者にとって関心がある章の題名と筆者を書いておきました。

1.社会を解剖する

セルジオ・ブアルケ・デ・オランダ、ジルベルト・フレイレ（文化相対主義によるブラジル社会論、小池洋一）、フロレスタン・フェルナンデス、ダルシー・リベイロ、パウロ・フレイレ（被抑圧者の教育学、酒井佑輔）、レオナルド・ボフ（「解放の神学」から「神学の解放」へ、乗浩子）

2.低開発と闘う

カイオ・プラド・ジュニオール（唯物史観による最初のブラジル経済史、山崎圭一）、セルソ・フルタード（低開発を解明する、小池洋一）、フェルナンド・エンリケ・カルドーズ、ルーラ（人間の尊厳、飢餓・貧困と闘うルーラの原点、子安昭子）、パウル・シンジエル（もう一つの経済を求めて、パウル・シンジエルの連帯経済論、小池洋一）、セルソ・アモリン（多国間主義の伝統を貫く、子安昭子）

3.社会運動を率いる

ラオニ・メトゥティレ、アブディアス・ナシメント、シコ・メンデス、マリナ・シルヴァ、シコ・ウィッターケル（開かれた空間による連帯が政治を動かす、田村梨花）

4.多文化を編む



マシャード・ジ・アシス、ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス、シコ・ブアルキ、増田恆河

まさに編者がのべているように豊饒な社会思想や理論で、多方面で先進的な試みが、満載です。読者は、興味ある章や 20 に上るコラムをつまみ食いして読めます。そして、読後は、きっと満腹感に浸ることでしょう。多くの方に読んでいただきたい本です。

データ：小池洋一、子安昭子、田村梨花（編集）『ブラジルの社会思想—人間性と共生の知を求めて』（現代企画室、2023 年）¥3,630

単行本（ソフトカバー）：512 ページ、ISBN-10：4773822120、ISBN-13：978-4773822120

[執筆者一覧]

小池洋一／子安昭子／田村梨花／住田育法／岸和田仁／三田千代子／酒井佑輔／乗 浩子／山崎圭一／受田宏之／渋谷敦志／下郷さとみ／矢澤達宏／石丸香苗／鈴木美和子／印鑰智哉／武田千香／菊池豪人／マウロ・ネーヴェス／福嶋伸洋／エレナ・トイダ